河内志編書七志法

ヘ13
3251
2止

へ 13
3251
2

昭和十一年
二月二四日
購求

河内名物図会巻之四

栗杖亭　鬼卵著

神戸市立図書館蔵書

○道奥屋娘阿仲河内へ赴く話

河内平野町。道奥屋孫右衛門といへる町人あり。由所ある者よりて。代々河内国の太守。高安左衛門尉殿の御用達をなす。高安殿御子多数あるなり。奥方疾病深く出産妾紅葉殿といへるを恨みたまひ。毒殺せんとのはかりごとなりしが。高安殿安らず。懐妊の紅葉の方。御用達孫右衛門。未だ妻もあらねば下さまなる。孫右衛門の御種を姙しぬ。大切よ。孫月を経るまで。玉のごとき女子

まうけるを乳母おはといへると石抱いつくしみ育
るふ。はるこの年に紅系いを生まうる。まうる孫産つ
ハ縁夫とあり。乳母のおはよまれ子なく懐妊して。
男子誕まうけるども娘い大切なる厨の内種まきい。
男子なりとて。我家を立べきかあらどと。里ふるいし
不通ふ言しをべ。乳母おはい相夏。仲と大切はて。
内侍の局佐さへせず。十三年言しるふ仲秋系
の清七を養子して。日ふ系はせしうおとて合一家
の松をうはしるう。今ハ中く昔ハものと出いどうしふと。
右ふのう。日ふ清七が事をやらず。をふ

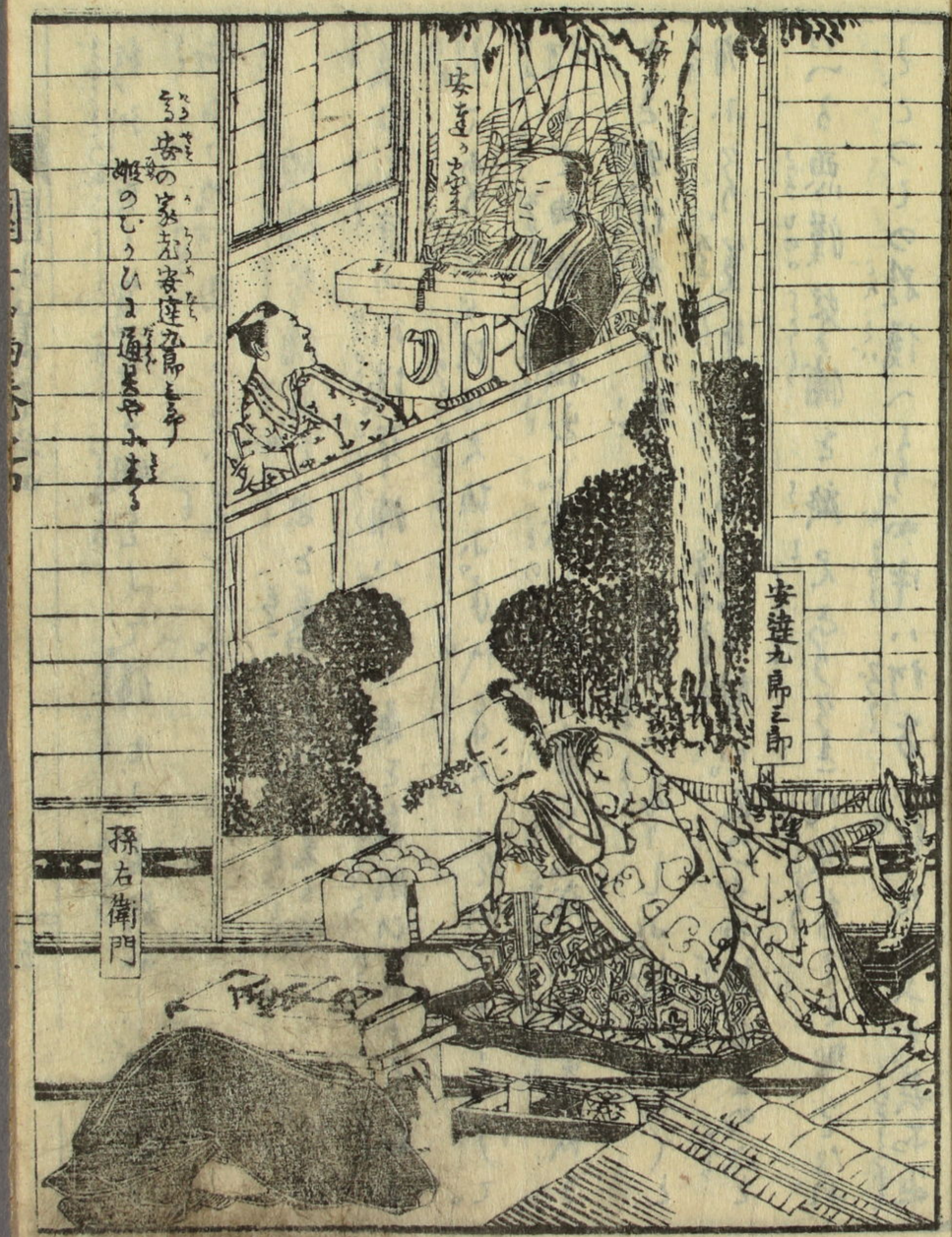
あるハをれば。乳母おはよくも是を悟。さまざまおか
よをへく。夫見なしれども字入ず。孫右衛門相
とさう。大切の暇り来もまを侍七に。深名立て
いうせんと。是も公を痛ふ。或日孫右の系也、長刀持
二十人斗の供をうを石連。五流の侍。孫右衛門方へ案内
して入まるふ。孫右衛門事ふやと驚出迎ば侍威
義を礼しふい河内の国高安家ふ仕ふる。安達九郎
三郎とト者う大厨大膳門府殿奥方の疾加と思き
紅系の方をいさを女ふ出産の限いは事あれども奥方
を頂う。吉信もなく手ふうう。ふるを安達て奥方も。

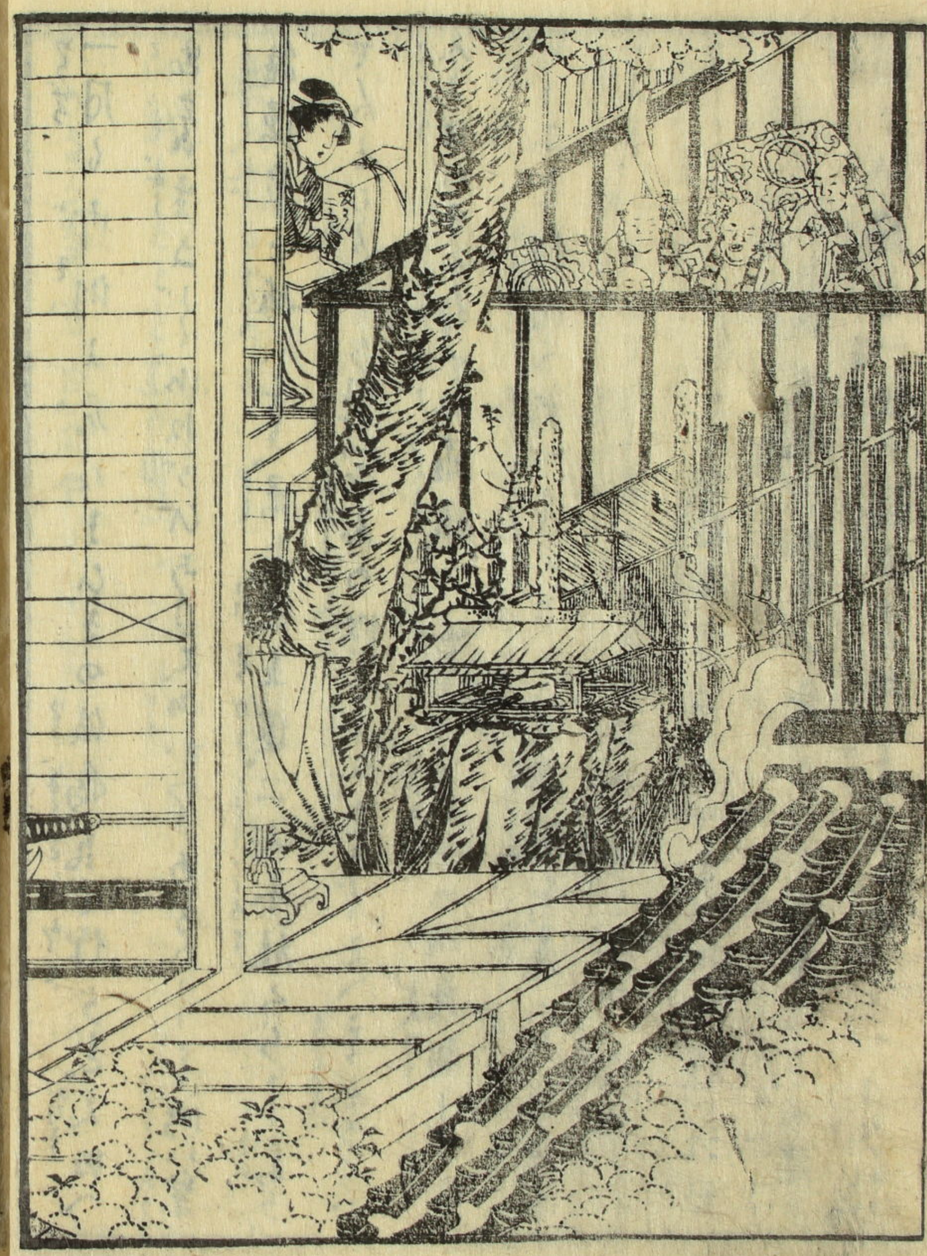
遁去あり。此る達も遁くれ隠まさせまひ。此ん様しく思ひ
御舞への孫右衛門方よりある娘こそ。忍しく氣程なまば。
若殿右衛門佐殿。此国おる。翁夕御例おおうまたを思
石ふて。此爲拙者を此遁てさ〜敵を。長しの養育
清盛ふ思石。金千両爲ふ。微宗皇帝の魯の一紬と下
さる。家来ふ持せし。千両箱掛物を。うやくしく差
出せば。孫右衛門ハ大ふ喜び。孫の中より町人の方ふ養
娘。大名の姫君ふ成事。難有仕合。嬉や娘ふも取ゆえ。
まづく奥へ此通ふたさるべしとさまく答爲し。
娘お仲ふ向かくと告まば。お仲ハ作天して。いとでいやしく

町人の家ふ育ちし。奴家。大名の此例ふ仕ハまんや。此
事ハ家を亡ふも。此所作らまを下さまよとくよ。乳母お仕
そまハ。ふる事と作らまいや。厳様の此程なまば。
かく此世ふ有るる。ふの人のいう程乳とも。出来る事ま
あらず。早く用意したまへとさまく。傳ひまども。兎角
お仲ハ。清七よ。ふ敵まば。河内へ参ふ。と。敵を
かるしくる。乳母ハ早く其意を悟り。清七と偽ふまるき
其ふる中とまと伏る事。人ハきどとおりのみらん
ぐ。氣ハくくり。能知り。今日河内を守様。此遁系
しハ。あのるの出世此とまと事ふあらどやふるといまこ

たまゝ、全くそゞへ名ばとたしゝての事ならん。今日
お中名。河内へ出紙をとゝ時ハ。数代の出入もとゝ。且
彼の出方のとゝ。何とぞそゞの仏一つを。河内へ出
裏入あるやうふ。新めたまへと。注とせめてつゝ。清七も
紙入いふふも仰の通り。ふとゝ一ハ一事をとゞ。主人
の事。此方いうんともを辞退し。河内へおこし
あらばお伸名の御出世とゝ。私出勤中。河内へ御
裏入あるやうふいとさんと。お中紙儀へ拓を。今日河内へ
出紙をとゝ風邪の出雑後。数代の御出入もなゝ。
いうゝ事も出来やせん。まづ今日ハ河内へ出紙ありて。

一月も御例よ居たまひ。その後病気と仰らを。大坂へ
出養生さゞ出ねゞひありて。出かゝるべし。ゝ時ハ紫
紙医家と拾へとゝ。君と連立退。二人仏紙くらし給ら
せんとゝし。それば。女ん御ちかをすゝへ。ゝ仏ゝらい
今日ハ名の出雑後よ。ゝとの出悲報しゝ
いうふも河内へ行べし。かゝらず其仏を遣へゝなと
ゝ。何がさて紙ゝちゞゝまし。ゝく出用をあられ
よし儀ゝ。ゝらを。其用をゝ。ゝくゝ。孫右衛門気毋
ゝ。ゝ収び出投者の九郎と命ゝ。ゝ安達も
収とび。体ゝ一世の暇と気仰。系図小のゝ一ゝ


安達の家老安達九郎三郎
姫のじゅひを通はやみまる
安達九郎三郎
孫右衛門


團七蔦巻之四

行列見くゝ義。吾ゝ眼をして。清七ゝ名ゝ行ふしげゝ。かは
ゝ行ゝ。河内へゝそい義ゝ行ゝ。

○傾城琴浦後ゝ恵と義ひ大坂へ来る話

義ゝ乳守の城塀。琴浦ハ。後ゝ恵を義ひ。くゝ動も
引てゝ行ゝ。後日大坂ゝ代ゝ。ゝてゝ行ゝ。
何とぞ曲輪と抜出て。後ゝ恵ゝ義ゝ。武叔乳守ゝ
ゝ出。住吉ゝ。ゝゝ。長町を通りしゝ。叔ハ行くと
ゝ行ゝ。笠牛ちんや山駕舁ハ。よつぴの捨ゝまの八と
いふる悪漢。琴浦を誘えんとゝ。ゝ。
とつとの捨侍へゝ。女中ハ何方へ行たまふぞ。其ゝ迫

ゝを石きいへと。ゝやそらふ。同かくまび。琴浦舎釈
して。何方と尋も行らねと。團七とふ人。大坂ゝ奥南ひ
ゝゝいすとゝたまび。ゝを尋るゝとふゝ。ゝも甚
ゝ七とつ人ハ。楽舟ゝる人ゝまび。送ゝ種糸らせん。
まゝ見ゝの。ゝ賃と拂ひたまへと。ゝまび琴浦ゝふ
紙ゝ。金ゝ出ゝとゝ出しゝあたへゝまる人大ふ怒ゝ。武叔
通しゝ。ゝ武義ゝゝ。ゝを分半の賞ふて渡べき。
ゝ両ふても安ゝ。ゝ。義出るべしと。せめゝまび。琴
浦ハ。ゝる事ハゝゝねゝ。二里半の通ゝ。義両の賞
ハ金ゝゝく四ゝ。住吉ゝ義ゝハ二里半ゝ。ゝの

多く進じたまとおりのしふ。不そとや。奴家も国七屋
方まで行きバハうやうとも殺そぐし。先を分を後を七
どの方を。送りそぐけうをと。頬を字入す。色や角を
さら合。そ西をえんと事をを。狗ふねの三姫住吉詣
せんと。朝〳〵計ふを者ひく。ふ。若き婦人を。嘶
罪ども両人ふて。せちぐ人殺るをバ。伊の使ある乳バ
文書をを方達い。そ郎ふ。住吉ふり義をの
野ら代。達を分計女中の出さをたると。不見なりと
声るふいぶる。二里弐百疋の雪代い。世ふをを直
陰ふりごまを事ふられ。ふく達信えてかへるべしと。

扶持ををバ。両人天ふ怒。いらとる親仁の扶持うふ。
かけうまいぬ事。そうんて居をとうよ。狗永いよく
殺を主。法郎のねなり主をとるを由へ。扶持ををバ主郎
のやーでらうをへ出ても二里百疋とりふ。雪代のある
べきを主て行ぐらバ。代賀所へ引ぐりをうんと。白服付
きバ。悪漢ども。怒星。雀親仁ち打殺せと。悪扶
打ふ。打ふ。ふ。ふる弐。大阪よる居をを。狗永の三姫とりふ
親仁をぐ。かる浪色いせ。扶ぬ事性をまバ。ふぬら宮
引ふりて。代賀所へ居出ー。此阿弘性街道の悪仁
癖弐主ー長んと。大ぐ扶。ふ人を捕まを擲合ーら。

いらで両人及ぶべき。推引たる。大よ歩くへらきければ。
ふらく迷て失ふる。琴浦ハ。ふりひも引らぬ笑雖よ
て。雖涙せしと。泊毎よ助うを。嬉しさ限なく。礼謝す
きび。三蛇ち笑ひ。あの驚る畢ハ。此辺の名代者こそ。
こらしりんとおりひし小幸のおりまきべ。かく斗らひし
ゑう。其えい新まこそる人とこそ信なん行国を弱て打多
ふや。定ゆてを事ならんとこそ。琴浦淺なりし。奴家
い乳母の仮様。琴浦をとまのいひらいせし人鈴高うけ
たまひ大坂よ町人まそしまるとほのすしまきまふ金
く。曲鳴を抜出まうとこそ坂い程と高ふ事さ

らきしやや。琴浦答へて。爰高買しゆえ。茶七仮を高で
ゆうといふ。三蛇よ仮ち。扨い仮く悪どのう相方琴
浦どのふや。ゑい其悪七といふ名ゑ。ゆ程ゑ世程
仮をべし。ふうし廓成久為ありてハ事六敬。てきも
悪七と相撲して。いうやうとも可付ト。さんと。琴浦を
使ひ。九郎を湯方へと急ぎる
○大番佐賀右衛門番頭の注義に大坂へ来る程
爰よ大番佐賀右衛門。行幸仮く悪。泊系るきやうに見ん
と。ときまし立まゑ。るう。淫牡丹の番頭を。ゑまう
呼出し。ゑとるば。彼が泊系の潮いるまどと。武蔵助

主斗よハひなるハ。系図月浪牡丹の番傘を。風の
後まお影り及びは。所詮義拙者よ作付らきゑハ所家
の主盃皆時も果く。所るふ入くいと。忠臣義ふ速なる。
主斗い腹そ逸ふ詮義と也。伯系の作りふせバやと思へ
ども。私よ其事も斗いまず。只下仏面あるふ。ふ。
陸分寄出しまくと云後し。蜜よ矣古夫ふ。かくと言げ
なくバ。系なるなら吸腹く逸。伯系の個ば矣う人幸うれが。
大事うう以前よ。寄出せよとふもへども。幼角の分ぬ。
いぐせんと仏と痛なるが。若堂とひそふ拙き。當時
国七も九郎左衛と名を汲の負商笑して。打所嘱ま

来るうしなまバ。彼よ此事と告て。腹く逸よ詮義させ
んと。大坂へかくと云後なる。九郎を婿い泄りなく
仏をまども。今ふかめて志まざるうへ。大事佐賀右衛
詮義の後と家うしと字て。程矣仏をせき。腹く逸と
拙きて。相後せんと。孫右衛門方ま手紙。矣古夫の問と
と。蜜うふ後ふ。いくせんと相後なるふへ。約毋琴浦を付
くうひまなまバ。琴浦腹く逸とて。大よ悦ひ。或ハ眼を
あうひい敬き。此後の銀雅を速なまバ。腹く逸も番傘
詮義よ仏と痛ふ。おしいさるふいあらねども。吉信もせざ
る。後て久しを地後ふ。憂と恋をなるが。九郎左婿三郎ふ

けいせい琴ノ浦
琴ノ浦二人の
こころものに出会
うんざのこころく
猪之のこぬ
みさの八

いへらく。琴浦反曲瀚と掘出たまひしを紅方かくまい
おきてハ。ひそかに男式麿をして甲斐なし。琴浦ぐのけふを
〻字たまへ。破〻恋とまの山みるきバ。一先乳ちへ主
かつ。爲く勅たまへ。香炬塗義ありて。山陽系あらバ。
狗紅系備ともいうやうふしてゆも。山方と変出し。
長く孫せまいらせん。文武あうしを引入てゆ。雑波型の
亭主と、恋主の系。一分主ごとしと。事とけていへ。旅
恋もとも〻。爲くの反ふり。系陽系せバ。今の紘式
を背ごうふせんとさまし〻孫ゆ久をゆ。琴浦も納得し。
廊へ移る。ふよ移久をべ。狗系も収び。九命玄湯ゲ阿を〻。

系琴浦を乳ちへ送る。只下の主公を伝ちんと。琴浦
と再び駕ふ手系。湯の廊へ来る。國七ゲ方へ寄来し
みまども。山亭主と山恋主中ゆへ送るうへしいと。國七
に式述久主ハ。雑波型の亭主ハ収び。多アうり方くと
ま分を殺し。尋させしふ。恋七反の山志摩けるしと乳
謝ちとバ。狗系かさねて。琴浦と岩しく。手推したまと
まうれ。破く恋反阿系あらバ。行きふしても変出しゆ
べく写。系侵を加へてたまハきと。阿と砂し阿り多。大多
佐賀右主ハ。香炬塗義の市用うと。巣写しくと大
仮へ来るふよ。こつも推。ゑまの八ふ出舎。廻報沈日八沈国

にかゝらず。今朝かやうくの事まで。琴浦を駕に乗て
来りしに。釣舟の三婦と申親仁の出会志たりかなる
目に逢申れ。琴浦曲輪を抜出るうへハ。旦那の継代品物
なり。磯之丞様入どに渡すに入ん。我等にかくの金を下され
なバ。三婦が方へねだり出し。琴浦を引つれ。来らせんと云
に。佐賀右衛門打聞き。其方共働きにて。琴浦を我手に
入るならバ。褒美ハ望次第にとらさん。先当座の手附
なりと。金子五両投やりけれバ。両人大に悦び。是ハ雑魚場の
甲斐ハ縁波村。先より来り。釣舟が方へ往りけり。琴浦を
引つれて来らせんと。先に進んで両人ハ。大坂さして

急ぎける。佐賀右衛門ハ跡を眺め。番頭詮議の心当ハ
あられねども。大坂道具屋仲間を詮議せバ。知れぬ事ハ
あるまじと。心に頷き。白昼に大坂へ入らんハ宜からぬほど。
まづ浪花にて。一夜を明けんと。名にしおふ浪花卯右衛門
方へ立寄。大臣にて揚屋も。大に酔酊して。黄昏比揚屋
坂城佩まじまゝ。一足ハ高く一足ハ低く。ふらくくと行
ける。後より悴吉と呼ものあり。佐賀右衛門不思議に思ひ
かへり見れバ。面を包たる其人の。佐賀右衛門何故
礼しつ。悴と呼しハ汝の事か。我ハ親とつれぬもなし。人
違ならんと。行んとするを引留。噫不審するべし。汝の

親。佐賀を婿とするいとこなり。佐賀右婿つ程も既をうる。系親いかゝの事ありて。湯の七夜ゞ淡うへゝ。早星氣往たる。汝ハ何者なるぞ。我と紙と数くと紙をれば。面解紙ハあれども。佐賀を婿ふさも似たり。其時佐賀を婿ふとひくして。我為命の横ふ汝が出世の種よ。事もあるとも。爰い遂中なり。系今ハ二河屋義平治と名と汝が此近所ゝ住居をるゝ。へう青い系方ゝ一宿し。妻しを事も語らんとゝ。佐賀右手ゝ脱ゝ絶へど。俳ゝ育恵の涙ゝとの此事ゝ。系もゝ上る事も斗るをば。此宅へ供して。くハしを此物語ゝ上んと。

連て。義平治ゞ宅へとかつるる。

○三河屋義平治女房殺ノ話

夫ゝ義平治ハ。佐賀右手つと休ふい系家へゝ。女房のお百合ゝ。ハ湯の御家中ゝ。大切なる所言ゝ。此地を中べしと。種く食事。女房ハ先へ森とせ。両人さしゝ向ひて。義平治へ。あのやうと。風汝ハ系美のゝ。汝ゞ夫のいひし事ゝ述。係市ゝ殺し。係牡丹の香爐。石両の金ゝ元しをとも。無ふ焼後と為て。相合と変し事ゝ。

為もなく。俳ゝくをば。佐賀右手つハ女房の横死。破ゝ系と淵ゝ為さんと。香爐の徐義をねがひ。此爰へ係牡丹徐義

のたゝ。出板せしゝ。義平治はび。まゝらべ
我まよ。香燈あるらい。彼今会を見孫を亜。つゝ往ゝと
碎くも。出べとやうまし。志らし其番燈ハ。通奥座孫蓋つ
とゝ去の方へ。百両の貨物を入金なり。金罕高用まて
年を。ハの方まて。賣拂いるも徒まし。後一刻もくや。
金ゑ代こしらへ。番燈と此方へ。金を。きべ。ゝらすと拙
俄よ。佐賀ゝ。ゝらい。金罕此用も一両日ゑまべ。義
一月切て。賣拙ふうてい。悔てせんまし。ゝハ。ゝ扶通
ふを。涙。金ゑの上面をし。此方へ。ゑ金。玉鳴親ゑい。
明しゝさんと。亜ゑ出きべ。義平治も扶。後ゝ。如

月切ていハ此方の侭まうふ。ゝるまべ。金ゑ。用達して。今月
日の中ふ。まるべしと。ゝし合せて。佐賀ゝ。涙をさし多
かうゝ。義平治ハ。ふうゝ。戸代メて。ゝんとゝるに
伏たゝむ百合ひつゝと。紀て。扨てゝるとハ。恐しを入
中。涙まて入ゝと。侍。ゝ後。侍市代殺し。番燈金ゑを
盗ゝ。さまゝの悪事代ゝと人ともゝず。言せし
事の悔しさよ。此通代皮正へ。作人して。ゝ家の代に
ゝらざるやゝよせんと。代り代引とも。扨ハ。ゝ。ゝの
後ゝ。ゝ代。ゝしゝよゝいかふ。ふも。ゝらいゝゝと。侍ハ。ゝ
後ゝ。ゝ代。ゝ。面代ゝ燈後とゝつゝ後の。ゝまゝと。侍人

大福長
白木綿屋
おぼこ娘女房百合を
儀平次と
殺す
儀平次
百合

せんとハ。余ッて情なし。財よりけ爰ハ。將ゞ出世の種とゝなれば。
ゆゝしなしよ。新く入と。兩手を合たのミ入まとべゝ。百合から
しゝと。打笑ひ。是の人や。燒殺とあて。命中成立しとい。
いつハ。体ハ。潔のくゝふ。是ても。夏の服と。愛人どうの
係ならずや。ゆゝ。ゞくゝ。怪しゝを。悪人。早く。行人して。
此方の眼れ。近ゝ。ゝ。和ましと。再び。義へ。紙れ。ば。義を
沿り。戻し。二世と。契ゝ。夫の。行人せんとい。波。合。悪を
ちハ。悪ふ。佐ゞくゝが。女房の。ゆひ。ならぞや。今。一。食。ゝ。ろを
辭めて。了。勇せよといへども。文。ゆ。入す。思しの。人や。此
事。成。係しゝ。玉。未。ゝ。いうやうの。月。を。進んも。身ゞと。そこ

のきたまへと。義。平。沿。とおしのけ。会。程。を。門へうけ。出
と。言て。引しゝを。已。為。身。を。係。を。あ。を。ば。て。そ。ま。ゞ
と。言。ゆを。に。ゆ。沃。ゝ。ま。行。ふへ。行人せんとい。將き
女。ゆ。ゝ。る。言。ゆ。毒。を。食。ば。血。を。ま。ゝ。と。の。後。の。ゞ。生
ゝ。て。ハ。濃。日。の。さ。ま。た。け。と。あ。ゝ。ふ。あ。を。つ。る。毛。綿。の。ゑ
ゑ。と。前。ま。ま。と。ひ。引。ゝ。を。ば。を。い。口。將。や。女。房。を。將。を
殺しゝ。ゝ。や。を。人。殺しゝ。ゝ。と。ゝ。を。と。声。を。さ。せ。しゝと
係。ゝ。ゝ。ま。い。ま。を。成。も。が。き。終。ま。を。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。る。
時。ま。廣。風。の。ゝ。ゝ。ろ。に。け。ら。ゝ。と。ま。笑。ひ。佐。賀。を。將
ビ。の。を。年。合。邦。が。辻。ゝ。い。ゝ。や。ゝ。ふ。し。て。ま。ゝ。と。を。

眼をとぢ。せといひしが。無藻のしお百合よ。永眠
深れ者よ。メ殺させしい。お沢うとさも思しきと。
廣風のよう出しくまび。流石大盤の義平治も
作えして。拘い海が函魂。お百合よ。を付永に殺さ
せしう。時き女ういもしきと。例よあくつる振舞引
接切付まび。只猶のぐく消矢ろ。其時始て仏付女房
お百合とえまび。毛彫よて人殺しなら拘も不俊の
事やと。欲悲ども。徒ふけまび毛彫武を。お百合と
えのどくふ孫させ。二階ふ伏たる。丁雅と起し。女房
る百合。を。ふ。ろ。稲氣よて。姉のお若しむる。早く

九郎を湯殿へ帰れ。時未きとけてましく遅やる。
丁雅ハ麻呂よ字付弱きなぐく九郎を湯方べを
約告ぐまび。園七まを帰大よ弱。よ迷純付ていぐと
寄ろふ。義平治ハ涙ふむせび。寄ろ何事なく伏し
たましふ。急よ悪といひしが。其方達と。時ろる間
もなく相果たろ。孫氣やと。大声上て泣れば。
おかぢう殺さハ矢ろ。九郎を場もけ程ハお絶ろら
ろしふ。明ろ事のあらんとハ。おうちも久しく対面
せざまび。明日ハ系らんといひしふ。拘く毛常迅速の
世中やと。夫婦ぐ殺大ろとならず。表とともふなき時

多。かくてあるべき事ならねば。翌日出家。狗永一寸法
とも。墓送のいとまをもとめしが。千日寺へ送り名ごりをこそ
形けり。

○悪漢共再び狗永に対郷せらる話

こつぢの拵。さまの八。大当佐賀右衛門と聞ひ。狗永が
文房者とかくまいしに。能仕ずると。高津北下町へ
しる。狗永の命狗永八琴浦式乳守へ体さひ。留ちのなへ
狗永ら迎る。一寸法を狗八。急おろし来る。狗永ごの女房
ご。孫ら悪ご事式咄しあるを。へこつぱ拵夢ら小。濡ら
迎人の者ら。早く文房者と出ときよと。にくふらく

と法を濡ら。えきび大和拵て永式牧し。悪漢ども
ゐきば。傍へらて投る式宵ば。女房を敢ず。文房者
式出せとい。叶方ら一寸見えるし。見て門返ならん。
おかと尋たまくとらふ。さまの八眼をむき出し。狗永の
親仁ご拉んで戻らきし。琴浦といふ者奥ら かく
まいあゝ事。とくとえ確ら。早く出したまへといふと。濡
ら濡おらしく。なぶりてやらんと傍ら。拵者ら近ゐの者
ゐるが。こぬ八今日八代りいらでさやらの者と。かくまいドす
べし。ゐる事ありてゐらつこ。あやはらふふつふよいよ。俗
よう叶男ハごりやらえたるやらる男ら。えの知るに

あらず。三姉が留をとゝふて、を侍よかへるへきを。家さ
きてはき降るとつゝ奥へ踏込んとすると。源を婿探家殺母
が留守成ると系。一すもなへいやるまゝ。もとうかくまい
おうぬ者と。淫義せんとハ。不在ようとつふ不へ。殺母も。琴浦
を送りそゞけを降りしが。系内の強しを。表よひうへ
ともちゝず。其方いう狂ちんじても。系ハ乳母の雑波やう
歌をたる。淫義の役人すゝかくあらゞふ上へいよ〳〵家さ
がゝせんと。をあがるを。源を婿雑とひうへ。ちうらバ見非もな
を幸ゝ。ゝ家ふあらずバ。其元方其分
ふさしとをがたし。留ち成ると系。どくと行ゝして踏込た

まへとゝふ。まい知をたらゝ。此方よ俺拙まくてかくふ
へきう。琴浦此家ふあらずバ母分よあらべしと雑引
雑し。納戸へかけ入寄をともあらざきべをどくたち
かへらんとする系を。源を婿をふさゞう。己等婿さやつぐら
うる。殺母が留ち也へさまゝ〳〵ゝとゝふと半入ず。家さ
さを。此男を五へきう。母ふ分ふまらんと。母をたうひしそ勢
くるを拙かくまべ。両人大よおどろを。逃出んとする成。
殺母まの八を引とらへ。己等曲輪の進人とゝふとゝう
者ゝ。系源通引ゝ。系乳ち へ琴浦成送て
がけよ不行やうをいや。付者ふ彩まをしそ

もぐふ白狀せよと。強き責ハ。こつどの拵とひしきを付まべ。
兩人の惡僕ふらひ出し。全く紅くが仏ふ生たる
事ハあらず。大多佐賀右衛門殿よ。彩色ふうと。いひ
拵てかけ出すを。拵をやつどら。今朝ハ琴浦ま金成
ねぐうふ。みくかやうの惡工をやつら。向後のこせしめ
ふ。蓮池ま。あらハせよと。引つ行。強き責ハ。拵も声を
あらげ。己日が大和拵まて。系とたのを。國七ふ系しの
かへしせよと。無理を云うけし事おぼえあらん。行まて
ハ。己等ガ非道。一く知たり。今も其根性の。直らざるこそ
不便なれ。いで一療治して呉んと。三好もろとも蓮池へ

お出さんくふ。お擲くまべ。兩人ま成合せ。命斗ハ
助たまへと。濡嵐のぐふ。おめ〻おめ〻逃失る。

○三河屋義平治香炉成敗

扨も大多佐賀右衛門ハ。堺へ立帰り。小西付系といふ素敵
ふて。金子百兩借受ける。三河屋義平治ガ方へ
まる。首尾よく金子借ふ。ぞく牡丹の香炉とり
かへしたまへ。系今日御用あまべ。晩方天下系屋
迎ふ出やうぐ。無間遠香炉成敗系しふ。会まべ
旅ふ出ハ。裏あらせ。出せせんハ。迎付ふ。いさまべ
加往晩方まで。おい。香炉を返し。天下系屋ま渡す

はら松のこゝ
ろ
そこの様
つゝこ女房

一すゝ虫こゝ
うまの八

へし。必ず気づかひあるまじと。佐兵衛とかへし。其身ハ
道具屋孫右衛門方へ来り。密かに孫右衛門に逢。香爐を
取返し下さるやと。金子を渡しければ。孫右衛門も金子
元利受取。手形を戻し。香爐を渡し。立かへらんと
する所に。居合居たる手代を見れバ。ちと悪かりし。是ハ一大事
と。面体そむけて帰り行。清七も世にハ似たる人もあるものと。
大方佐兵衛が弟に生写しなりとおもひ。傍輩にたづぬれバ。
あれハ團七九郎兵衛の弟。三河屋の義平治といふ人なり。
といふに驚き。是まで團七が世話になりたれども。終に一度も
面会せず。幸のおりからに対面なし。何故に旦那と。口論を
せられしやと。奥へ行て九郎兵衛の弟とハいかなる事にて
勘当せられしや。又今日何の用事にて。口論をされし
やと。余所ながら尋ぬれバ。孫右衛門答へて。去る浅牡丹の
香爐を持来し。金子百両借受しとの由へ。似物やと疑ふ
に。世に稀なる名器なれバ。早速用立しが。元手明日ハ約
の日限切るゆゑにや。只今金子を持来して受戻し帰られ
たり。さてしもおしきものなりと。何心なくいふに。ぞつと驚
き。其香爐の模様と箱の書付などを聞に。殿の重宝
にすこしも違ひあらざれバ。扨ハ大方佐兵衛が渡し。盗出せし、
弥市を殺したるも彼が業ならんと。飛立おもひに。我

ゑ。智時の眼をたまはいまと。云捨て。九郎を佐方へ弘まり。
かく〳〵の事ありて。其えの買。と河屋の義平治どの。浮牡丹
の番頭と。主人孫右衛つどのく方へ。金百兩と質まい見。今今
後戻し。返ひらまうら。横ぶ成まよ。殿の金を盗ふまときき
ゑし。義平治どの。そを射面とせざりしに。浮りがけれちら
てと。点とゑるふ。去年へろせし。大事佐賀を浦ふ少しも
遺いず。全く佐賀を浦へ水といつく〳〵孫市と殺し。番頭の
盗賊よちびあるまじ。去いど徐義してたべと。息絶切て迷
けまバ九郎を浦も作天しているとまを去年へ賀よ来し
時ふり。弟子の果と。母如房もいひしがふしく佐賀を浦成

べし。志うし義平治者ふあるやたし。幸の如房
おかぢ。母ふ百合丸去ものへと河屋ふ居るまバ。五郎様まを
丸きんと一緒ぞつ迫。三河屋へ来るふ。如房一人あり〳〵れ。
智屋へ行ふ方へ行ふ。たづぬるまをバ今弱侍一人
ゑゑらを。竹角屋を。金まと浦し。晩方天下来屋まで。
物来ふまと。いひ捨て。四ちきしゞ。智屋もそをちう出まひ。
今ふ。うたまはぬとゑる。母ハ智いゞ下寺町ちう。安敦殿
の方へ行ちん一時のおくをい三里ちと。風引ちばいり
出をべ。如房おどろを。寺をとうへ行方へ行たまを人をとを
ずうるし。長町をし〳〵て。韋駄天のろ

宗庵氏蔵書記